

今週のメニュー

■トピックス

◇大同樹脂(株)の PTP リサイクル事業

ー工場端材を塩ビとアルミに分離。新工場にて本格稼働中ー

■随想

◇モザンビーク共和国旅行記（8）ー経済ー

一般社団法人 日本化学工業協会 若林 康夫

■編集後記

■トピックス

◇大同樹脂(株)の PTP リサイクル事業

ー工場端材を塩ビとアルミに分離。新工場にて本格稼働中ー

昨年6月、PVC news(2013年6月No.85)の「[リサイクルの現場から](#)」で紹介した大同樹脂(株)のPTPリサイクル事業が、新工場建設から本格稼働という新たな事業局面を迎え、事業スケールが大きくなりました。そこで、その事業規模の変化と新工場のスケール等を少し詳しくお伝えいたします。

PTP(press through package)は、密閉性、防湿性が高く、中身の品質保持に優れることから、薬剤包装の主流になっています。PTPは塩ビやPP(ポリプロピレン)などの透明なフィルムにアルミ箔を熱接着して作られますが、製薬会社の厳しい品質管理の中、各社の工場から端材(抜きロスや規格外品)が排出され、その殆どが埋立や焼却処分されてきました。このような状況下、同社は2008年からPTPの材料リサイクル(MR)技術開発に着手し、2011年にPTP処理として月30~40トンの規模での事業をスタートさせました。技術改良を重ね、安定生産の目処が立ったことから、2013年7月に新工場を建設し、2014年2月より本格操業に入りました。現在の生産規模はPTPとして月120トン进行处理し、月当たり塩ビを60トン、PPを30トン、アルミを30トン程度リサイクルしています。PTPの製薬会社からの搬入割合は、塩ビが7割、PPが3割であり、塩ビとPPの専用分離処理ラインを稼働しているため、PP分離処理ラインの稼働率が低いことが現在の事業課題という事です。



工場外観



分離前 PTP シート



分離後

PP の PTP は焼却処分の方に回るために、製薬会社からの入手が困難になっているとの事です。

新工場(連絡先:TEL 0265-48-0368)は、以前の工場(飯田市山本)から車で 20 分程の所で、工場面積は倉庫も含め 1,950 平方メートルもあり、事業を行ない拡大するに十分なスペースを確保しています。工場の周りは樹木以外何も見えない所で、会社を訪問される方々が道に迷われ、場所確認の電話が頻繁にあるとの事です。

稼働率にまだ余裕があるので、PTP 端材の材料入手量を上げるべく、営業・広報活動に注力していくので、興味がある方々のご訪問をお待ちしていますとの事です。

■ 随想

◇モザンビーク共和国旅行記（8）－経済－

一般社団法人 日本化学工業協会 若林 康夫

モザンビークの特産品はカシューナッツだとお伝えしました。魚は特産品と言うか、遠洋漁業の陸揚げ地でもあるので、特産品とは言えないかもしれません。

1993 年には世界で 2 番目に貧しかったモザンビーク、現在、アフリカでは「モザンビークの奇跡」と呼ばれるほどの高度経済成長期に差し掛かっています。

2000 年に入ると豊富な鉱物資源、特にボーキサイトを利用した大規模なアルミ精錬工場が次々と竣工し、現在では南アフリカに次ぐ、アフリカ第二のアルミ生産国となっています。また、天然ガス田も多く見つかり、石炭とともに南アフリカを中心に輸出が始まっています。

このように急速に発展しているモザンビークに対し、三菱商事はアルミ精錬の合弁会社を設立。三井物産は天然ガスの採掘に出資するなど、日本の企業進出も進みつつあります。

電力を大量に使うアルミ精錬、南アフリカなどに輸出するほどの埋蔵量がある天然ガス田、それに豊富な水量の持つ川があるのに、国内の電源事情は必要量が満たされているとは言えません。発電所建設の計画はいくつもあるのですが、建設の元となる資金がないのです。

首都マプトでも、私が滞在していた間、停電はなかったものの電圧はかなり不安定。190 ボルト～228 ボルトと大きく変化していました（公証電圧は 220 ボルト）。これだけ電圧変動が激しいと、電気製品もかなり壊れやすいのではと思われます。

鉱業に関する開発が進む中、モザンビーク政府は農業政策にも鉱業以上に力を入れています。アフリカと言うと“農業国”というイメージがありますが、モザンビークは長い内戦の影響もあり、農業開発が遅れています。農業に従事する人の割合は非常に多いのですが、生産効率が悪く、普段の生活に欠かせない多くの食料を輸入に頼っており、貿易赤字の増加につながっています。このため、大統領自らが日本を訪問し、農業開発の援助を求めているほどです。

主力の鉱業に関しても、国内技術者の育成が遅れており、アルミ精錬工場で働いている多くの技術者は南アフリカや経済が崩壊し、仕事を失ったためジンバブエからやってきた人たちばかりです。南アフリカやジンバブエからやって来た技術屋さんたちが話す言葉は英語が基本。モザンビークの技術さんが話す言葉はポルトガル語が基本。コミュニケーションがうまく取れず、事故につながることもあるそうです。

経済が発展すると、新しい建物建設、あるいは現在の建物を建替える必要も出てきます。また、世界各国から様々な企業が進出し、新しいオフィス需要も増えており、首都マプトは建設ラッシュです。街を歩くと、あちらこちらに新しいオフィスビルの建設現場が見られます。ところが、ほとんどの建築現場に“漢字”の表記が。建築に関しては中国の建設会社の独壇場。仕事の正確さ(モザンビークの建設会社と比べての話ですが)、建設の速さ、値段、どれをとってもモザンビークの建設会社は勝つことができないそうです。

以前、訪れたルワンダでも、ルワンダで一番の高層建築“ルワンダタワー”の建設が行われていましたが、その建築を請け負っていたのも中国の建設会社でしたし、それ以外の場所でも中国の建設会社の現場を数多く見かけました。

中国の建設会社が請け負っているといっても、実際に現場で働いているのはモザンビーク人の職人。職長さん以上は中国人。厳しい工程管理をしています。中国人管理者は期限内に完成させて幾らと言う契約で、工期が遅れると1日幾らで減額されるそうです。そのため、少しでも工期が遅れるとモザンビーク人の職人に残業を命じます。

ところがモザンビークの人たちには“残業”というものが基本的でない、と言うより分からない。仕事は食べるためにやるのであり、普通に食べることができる賃金をもらっているのに、なぜ、それ以上の収入がもらえるからと働かなくてはいけないのか。決められた勤務時間に、一生懸命働き、それでも工期が遅れるのは最初の工程管理に問題があるのに、なぜその尻拭いをしなければならない。

このギャップ、いつまでたっても埋まることはなさそうです。あまり強引に残業を頼むと、翌日から仕事に来なくなったり、小さな暴動が起こったりすることがあると、疲れ果てた顔の中国人現場監督が話してくれました。

日本でも同じようなものですが、仕事をしているときのモザンビーク人の表情と、仕事が終わってからのモザンビーク人の表情、かなり違います。事務所で見るといつも眉間にしわを寄せ、気難しそうな顔をして、話をしてもぞんざいに答える人が、休みの日にあうと全くの別人。民族音楽に合わせ、全身をくねらせて踊り、大きな声で歌います。もちろん、眉間のしわなんてありません。

実は、挨拶をされるまで、事務所で見た人だとは、全く気が付きませんでした (^_^)

(つづく)

次回は、(9) -モザンビーク共和国あれこれ(その1)-です。

⇒ [バックナンバー](#)

■ 編集後記

いよいよ、4年に1度の男子サッカーワールドカップが開幕ですね。スタジアムや交通機関の工事の遅れなど、試合とは別のところでの心配事も報道されていますが、当のブラジルの方達はあまり気にしていない様子。まあ、いいか…。(安全なら)

日本の初戦は3日後のコートジボアール戦。開幕直前のザンビアとの強化試合で2-0から4-3で逆転勝利した勢いそのままに、頑張ってください！
地球の裏側まで届くよう、声援を送りたいです。(漠)

■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)



◆編集責任者 事務局長 高橋 満

■東京都中央区新川 1-4-1

■TEL 03-3297-5601 ■FAX 03-3297-5783

■URL <http://www.vec.gr.jp> ■E-MAIL info@vec.gr.jp
